第三十四回江戸川乱歩賞受賞作

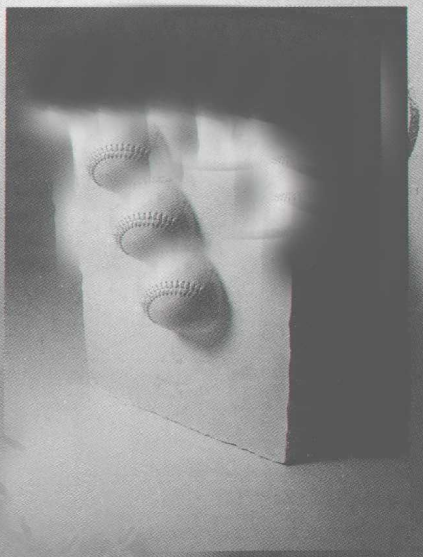
白色の残像

坂本光一

第三十四回江戸川乱歩賞受賞作

白色の残像

坂本光一



講談社

白色の残像

一九八八年九月十四日　第一刷発行
一九八八年十月十一日　第二刷発行

定　価　一〇〇〇円

著　者　坂本光一

発行者　加藤勝久

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一／郵便番号一一二
電話・東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）

印刷所　株式会社廣済堂

製本所　株式会社黒岩大光堂

©坂本光一　一九八八年　Printed in Japan
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-204118-9（0）（文2）

白色の残像

装幀　辰巳四郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

序　章

――昭和六十四年　夏――

甲子園の思い出は、いつも白い光のイメージに満ちている。

巨大な白い壁となってグラウンドを取り囲む観客席。選手たちの着ているユニフォームの白さ。グラブの中の白球……。それらの全てが、強い夏の日差しを浴びて、まるでハレーションを起こしたように白く輝いていた。

中でも中山の記憶に鮮明に焼きついているのは、マウンドから見たバッターのヘルメットの白さだった。対戦したバッターたちの顔や姿をすっかり忘れてしまった今でも、彼らが被っていたヘルメットが夏の日を反射してキラキラと輝いていた様を、中山は奇妙なほどの現実感を持って、いつまでも思い出すことができた。

それでも大会が終ってから二、三年の、まだ甲子園の記憶が生々しかった頃は、褐色の湿り気を含んだ土の感触や、津波のように四方から押し寄せてくる観客席の声援、ユニフォームに染み込んだ汗の匂い、そういったものがごちゃまぜになって、中山の心の中に〝甲子園の思い出〟となって根付い

ていたように思う。
それが年月を経て、記憶が薄らいでいくにつれて、まるでフィルターにかけられたように、白のイメージだけが中山の心の中で凝縮されていったのである。
そうして充分に年月がたち、中山が老人と呼ばれるようになる頃には、〝甲子園の思い出〟は更に小さく凝縮された白い光のイメージ、例えば白く輝く一粒の真珠のようになって、記憶の片隅に、それでも大切な宝ものとして、いつまでも残り続ける。中山は、そんな風に考えていた。
そして、それはたぶん正しかったのだろう。昨年のあの事件さえなかったならば……。

＊　＊　＊

今年もまた、夏が巡ってきた。
梅雨のさなかに始まり、全国各地で戦われてきた甲子園の地方予選も、きのう大阪の代表が決まり、これで四十九代表全てが出揃ったことになる。
八月初めの日曜日、東都スポーツの記者、中山涼介は、久々の休日をアパートのベッドの上で過ごしていた。六畳二間の安アパートだが、気軽な独り暮らしの身には十分過ぎる広さだった。早朝の爽やかな空気を吸い込んで、中山は大きく伸びをした。
（早いものだ）
天井を見上げながら中山は思う。昨年の甲子園大会を舞台にしたあの事件から、もう一年がたとうとしていた。
仰向けのまま腕を伸ばして、本棚からくたびれた取材ノートを取り出した。昨年、あの事件を追いかけた時のものだ。ノートの縁は、取材の苦闘を物語るように手垢に汚れ、折れ曲がっている。
ノートの最後のページには、新聞の切り抜きのコピーがはさんであった。

〈名門信光学園野球部員が感電自殺〉

大阪の野球の名門校、信光学園野球部員が、打撃の不振を苦に、電気毛布で感電自殺したというものだった。日付けは、昭和五十五年二月十三日となっている。

これが全ての始まりだった。

（この事件の真相に、もっと早く気づいていれば……）

何度そう思ったことだろう。そんなことは誰にもできなかった、それはわかっている。しかし、もし自分がこの事件と昨年のあの事件との関連に、もっと早く気づいていれば、あるいはあの悲劇を防ぐことができたかもしれない……。

あの事件から得たものもあった。周囲の人はそう言ってくれたし、自分でもそう思うように努めてきた。しかしそんな努力が空しく思えるほど、あの事件で失ったものはあまりにも大きかった。

中山は静かにノートを置き、目を閉じた。

ゆるやかな風が頬をなでた。

ゆっくりと目を開き、首を傾けて開け放たれた窓に目を遣る。薄手の淡いグリーンのカーテンを揺らして、心地よい風が部屋に入ってきた。

中山は、立ち上がってカーテンを左右に大きく開いた。途端に、堰き止められた水が一度にあふれるように、窓いっぱいの風が中山の体をすりぬけ部屋を駆け抜けていった。強い夏の光が中山の目を射る。中山は風と光の中に立ち、大きく深呼吸した。

窓の外には、朝日を反射して黄金色に輝く江戸川の流れがゆったりと広がっていた。向こう岸の川原には、野球グラウンドが何面か見える。そこで早朝野球を楽しむ人たちの歓声が、風に乗って意外なほど近くに聞こえてきた。ジャイアンツ、タイガース、ファイターズ……、それぞれの贔屓チーム

のユニフォームのデザインを真似た、色とりどりのユニフォームが躍動する。
（野球か）
中山は窓に浅く腰を掛けて、草野球の迷選手たちのぎこちない動きを目で追いながらため息をついた。
こんなふうに楽しむ野球がある。その一方で激しく勝敗を競う野球がある。持てる力を振り絞り、時には全てを犠牲にして。そして悲劇……。
窓辺を離れて、背の低いキャビネットのガラス戸を開け、中に飾ってある野球ボールを取り出した。
ボールの表面には、黒の細字のマジックで〈第六十三回全国高校野球選手権大会優勝　信光学園2—1神奈川三高　昭和五十六年八月二十二日〉と書かれていた。
勝利のボール、ウイニングボールだ。その栄光の文字の横に、指の形をした血痕があった。
血に汚れた栄光……、それはまさにあの事件を象徴しているように中山には思えた。
一度はプロの投手を目指した中山の指と比べても、その血の指紋は大きかった。その逞しい指で、彼はいったい何を摑もうとしたのか。
再びベッドに横になり、開け放たれた窓を見上げた。寝転んだこの位置からは、澄んだ青空が窓枠で切り取られた四角いキャンバスのように見える。
その青く輝くキャンバスに向けて、中山はボールを持った左手を伸ばした。キャンバスの中の白いボールは、まるで青空の中に浮かんでいるように見えた。
昭和五十六年八月二十二日。あの遠い夏の日に、最後の打者となった自分が、澄み切った甲子園の空に高々と打ち上げたキャッチャーフライ。
（あれも、ちょうどこんなふうに見えた）
中山は胸を刺す痛みとともに、そう思った。

第一章

一

――昭和六十三年　夏――

「まずは乾杯といこう。おめでとう、やったな」
「ありがとうございます」
中山は、ビールのジョッキを目の高さに掲げた。琥珀色に透き通ったビールの向こうで、東都スポーツの先輩、藤崎が笑いかける。
一気にジョッキを傾ける。冷えたビールが喉を降りていくのがはっきりと分かった。
「あー、うまい」
二人同時に、軽くなったジョッキをカウンターのテーブルに勢いよく戻した。自然に顔が合い、笑いがこぼれる。
「今日は何かいいことがあったんですか」
カウンターの奥から、店のオヤジが声をかけてきた。
長い会議が終って、中山と藤崎は、社に近い新橋駅前の行きつけの寿司屋のカウンターに肩を並べ

ていた。
「今日は会議でこいつががんばってね。ほら、うちで毎年やってる甲子園特集号があるだろう。それの目玉になる特集に、こいつの企画が通ったんだ」
「へー、そいつはすごいや。おめでとうございます」
オヤジが中山を見ながら、さも感心したように首をひねって言った。
「いやあ」
なんと答えていいか分からず、中山は言葉を濁してつまみの刺身に箸を伸ばした。
「はっはっ、こいつ照れてやがる。まっ、オヤジさん、そんな訳だ。今日はうんとまけてくれよ」
藤崎は上機嫌だ。
「しかしさすがのデスクも、今日ばかりはお前の熱弁にすっかり乗せられちまったな」
「そんな。ぼくはただ思ってることを一生懸命しゃべっただけです」
「いや、それがよかったんだ。デスクには変な小細工は通用しないからな。その点、お前の発言は横で聞いていても熱意が十分に伝わってきたよ。うちの社の連中も野球が根っから好きな奴らばかりだし、いつの間にかみんなお前の熱弁に感染して、俺もいっちょうこのテーマでいい記事を書いてみるか……、そんな気になっちまったんだな。デスクはその辺の気分を敏感に感じとったんだ。お前の力さ」
藤崎のピッチは早かった。もういくぶん酔いの回ったような早口で一気にまくしたてて、中山の肩を強く叩いた。
中山は軽く頭を下げて、ジョッキを口に運んだ。
(長い会議だった)
思わずため息が出た。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

長い会議だった……。

時計は午後八時を回っていた。狭い会議室には煙草の煙が充満し、タフが売り物の記者たちも、さすがに疲労の色を隠せなかった。

中山の勤める東都スポーツでは、毎年、夏の甲子園大会後に甲子園特集号を発刊していた。その特集号の目玉となる企画を何にするか、それがこの日の会議のテーマだった。

「香川工業の立花君を中心に、逆境の中でがんばる甲子園球児たちを追う、これしかないですよ」

中山の先輩である榊田が発言した。それに賛同する声が二、三あがる。

香川工業の立花選手は、両親が地区大会の決勝戦の応援にかけつける途中、交通事故で亡くなったのだった。世間の同情の目が集まっている。しかも香川工業は、昨年秋の四国大会を制した強豪として、今度の甲子園でも優勝候補の一角にあげられていた。もし優勝でもすれば「両親に捧げる優勝」として、最高のドラマになることは間違いなかった。この立花選手を中心に、逆境の中にあってがんばる球児たちの特集を組もうというのが榊田の意見だった。

しかし、中山は別の意見を持っていた。

「信光学園、習志野西、取手学園。この三校の激突を取り上げるべきです」

中山はそう主張した。

千葉代表の習志野西の向井監督は、五十六年の夏に信光学園のエースとして甲子園に出場し、優勝投手になっている。一方、茨城代表の取手学園の監督は真田敏行。向井投手と高校時代にバッテリーを組んでいた、かつての親友だった。つまり習志野西と取手学園は親友対決、そしてこの両校と信光学園とは師弟対決ということになる。

いや、向井と真田は親友対決というよりは、遺恨対決といったほうがいいかもしれない。「あの事

件」以来、信光学園からS大と、野球の名門をともに歩んできた二人は互いに背を向け、今では全く違った野球を目指しているのだから……。

中山は発言に力を込めた。

「この三校は、師弟対決、あるいは遺恨対決として世間の注目を集めています。しかし、私がこの三校の激突を取り上げたいと思うのは、単にそれだけの理由ではありません。私が面白いと思うのは、三チームのチームカラーの違いです。これは、それぞれの監督の野球に対する考え方の違いからきています」中山はそこで言葉を切り、一人一人の顔を見回してから再び口を開いた。「信光学園は高校球界の名門校として、野球部員は百名を超え、それを三軍に分けてプロ並みのトレーニングを行なっています。信光の特長は、百名を超える部員の一人一人を大切にして、それぞれの選手の素質や力量に合わせた練習を行なっていることです。それが、プロで活躍するようなエリート選手を生むだけでなく、大学やノンプロの名選手、あるいは優秀な指導者を輩出している理由のひとつだと思います」

「そう、そしてそれが信光の柴田監督が、現在の高校球界最高の指導者と言われている理由だな」

藤崎が、中山を援護するように口をはさんだ。中山は、軽くうなずいて続けた。

「一方、その柴田監督の教え子である習志野西の向井監督は、徹底した少数精鋭のエリート主義で知られています。習志野西は八年前に設立された新興校ですが、野球を通じて校名を上げようという意欲はすさまじいばかりで、数億という金を野球施設に注ぎ込んだと言われています。二面あるグラウンド、内野がすっぽり入る広さの雨天練習場、ロボットピッチングマシーンといった設備は、確かにプロ顔負けです。そういった学校側の強い意志を受けて、向井監督としては、一年でも早く甲子園で優勝を狙えるチームを作らなければならない。信光のように、大勢の部員一人一人に合わせた指導などと悠長なことは言っていられないんです。素質のある選手を一年の時から徹底的に鍛えて、いわば促成栽培することになります。もっとも、これが一般的な野球校の常套手段ではありますけど」

「なるほど、そう言われてみると、同じ野球校と言われる両校でも、チームカラーはかなり違う気がするな」

デスクの大野が珍しく口をはさんだ。それを受けて藤崎が、

「そうですね。同じように百人を超える部員から選ばれたエリート軍団ながら、両校の一軍チームの雰囲気は随分違う。信光は、今の中山君の論法でいけば、百人を超える仲間たちの代表として試合をしているという責任感があるから、実に試合運びがねばっこい。敗色の濃い試合でも最後まで喰らいついていく。それが〈逆転の信光〉の異名につながっていますね。一方の習志野西は、一度リズムが狂うと意外なほどあっけない。ガタガタと総崩れになるケースが見られます。今年の選抜でも優勝候補の筆頭と言われながら、一回戦で予想外の大敗を喫したのも、その例です。これは個人個人が、自分の為にだけプレーをしているせいだと思います。つまり精神的な支え、連帯感がない」

「確かにそれは言えるな」

大野が、煙草を丹念に灰皿に押し付けて揉み消しながら相槌をうった。

ほかのメンバーも、中山と藤崎の意見に強く心を動かされているようだった。

中山は勇気づけられて、再び立ち上がった。

「ところで、この両校とは対照的に、真田監督率いる取手学園は茨城県下有数の進学校です。今までは県予選で三回戦に進んだのが最高で、ほとんどが一回戦ボーイでした。それが真田監督を迎えてから着実に力をつけて、今年甲子園に初出場を果たしたわけですが、部員はわずか二十名です。サッカー部やラグビー部と共用のグラウンド、貧弱な練習用具といった条件は、まあ平均的な学校並みというところでしょうが、入試が難しいというハンディキャップを考えれば、いいチームを作るための条件は極めて厳しいと言っていいと思います。そんな中で、真田監督は甲子園で通用するチームを見事につくりあげた。そして彼は、よくこの種の学校が甲子園に出場した時に使われる〝一服の清涼剤〟

などという存在に甘んじる気は全くありません。はっきりと、セミプロ化した一部の野球校への批判を込めてこのチームを作ったと公言し、信光、習志野西を金権野球の代表と名指しで批判して、その打倒を唱えています」

「その意気込みやよしだが、4割を超すチーム打率を誇る信光と習志野西に通用するとは思えんな。地方大会ですら、一点差勝ちの苦戦続きだったじゃないか。甲子園では打倒信光どころか、一回戦突破も難しいんじゃないか」

榊田が、皮肉っぽい笑みを浮かべて反論した。

「いえ、そんなことはないと思います。確かに得点力は弱いですが、エースの宮本は大変なピッチャーです。高校ナンバーワン、いやプロまで含めて、現在の日本球界で最高のピッチャーかもしれません」

この発言にあちこちから驚きの声が上がり、続いて失笑がもれた。

(しまった)

中山は思わず唇を噛んだ。

宮本が日本球界屈指のピッチャーであることに、中山は確信を持っていた。確かに彼の防御率は、数字的には平凡である。しかし、彼はある意図を持って、わざと打たれている……。中山は、宮本の投球を実際に見てそう確信していたのだ。だが今それを言ってみても、自分の主張を通さんがためのホラ話ととられ、かえって逆効果になってしまう。中山は話題を変えることにした。

「私は今年の甲子園大会が、この三校の激突によって高校野球のエポックメーキングになる可能性が高い、そう考えているんです。このはっきりとしたチームカラーの相違を持つ三チームの戦いぶり。そして、どのチームが勝つか。その結果によっては、今後の高校野球の流れに大きな影響を与えると思うんです」

中山が着席すると、しばらくあちこちで小声で議論する声が聞こえた。
（感触としては、まずまずだな）
中山は期待と不安を込めた眼で、出席者一人一人を観察した。
藤崎と目が合った。藤崎は（それでいい）というように、笑顔で軽くうなずいてみせた。
その時、ざわついた部屋の雰囲気にカツを入れるように、張りのある声で榊田が発言した。
「野球というものに狭義に的を絞れば、今中山君の言ったテーマがベストでしょう。しかし、よく考えていただきたい。夏の甲子園特集号は、普段我々のスポーツ新聞を読んでくれている層とはかなり違った人たち、特に若い女性が大きな購買層になっています。この夏の特集号を起爆剤にして、本家の新聞にも女性の購買層を広げていく、これが伸び悩んでいる発行部数を伸ばすための重要な戦略だと思う。そのためには、玄人受けする野球ガチガチのテーマだけではだめだ。お涙ちょうだいかもしれないが、女性のハートに訴える企画にすべきです」
中山は思わず立ち上がった。
「それは少し違うと思います。甲子園特集号を買うような女性は、どこどこの選手がかわいいとか、あそこの監督がカッコいいとか、そういうレベルの買い方をしている人が多いと思うんです。そういう人たちに、野球とは直接関係のない、お涙ちょうだいの企画をぶつけても、その記事自体は喜ばれても、それが新聞の購買層の開拓にはつながらないと思います。そういう読者に迎合するのではなく、この特集号を通じて、普段スポーツ新聞を読まない人たちに本当の野球の面白さを分かってもらう、これができて初めて新しい読者層の獲得ができるんじゃないでしょうか」
その時、それまで時折口をはさむだけで、皆の意見をじっと聞いていた大野が腕組みを解いた。これから発言をするぞ、という合図だった。会議室の空気がさっと引き締まる。中山も着席して姿勢を正した。

「みんなの意見は大体分かった。俺としては、野球本来の面白さに真正面から取り組んで勝負するという考え方に賛成したい。ただし、信光学園、習志野西、取手学園の対決というテーマは、どこの社でも取り上げるだろう。それだけに見出しとしてのインパクトは弱くなる。先に特集を打たれて、うちが二番煎じになる可能性も高い。その辺をどう考える」

大野の鋭い視線が、中山をとらえた。中山はその眼をまっすぐに見返して、

「間違いなく、多くの雑誌や新聞が書きたてるでしょう。しかし、だからと言って、何十年に一度という歴史的な対決を見送る訳にはいきません。要は、どこにも負けない最高の記事を書けばいいんです。そして、そこまで打ち込むに足るテーマだと私は思います」

大野が小さくうなずいた。

「よし分かった。今年はそれでいこう」

それで決まりだった。

大野は部下から絶対の信頼を得ている。彼の下した結論に、あえて異を唱える人間はいなかった。そうと決まれば、そこは頭の切り替えの早い連中ばかりだ。すぐに取材の段取りの打ち合わせにはいっていく。

それぞれのチームの地方予選での戦いぶり、地方大会優勝から甲子園入りまでの調整方法、甲子園での戦い、さらにそれぞれのチームの歴史、チームカラー、監督の性格、野球観、指導法、他の二チームに対するライバル意識などの取材項目と、それぞれの分担がてきぱきと決められていく。

中山は希望通り、向井、真田両監督のライバル意識について取材することになった。もっとも、それは本人の希望というよりも、甲子園の決勝でこの二人と対戦したという中山のキャリアが買われたものではあったが――。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook